

研究科共通科目「学校教育の総合的研究」の課題と改善の方向性

学校教育講座（心理）・橋本 巖

1. 授業の目的・目標と概要

本授業は、総合科目として教育学研究科の共通必修科目に位置づけられた通年履修（4単位）の科目である。シラバス（2008年度）には、「今日の学校教育が抱えている諸課題について多角的かつ専門的に、また、総合的に考えることができる」ことを授業の目的としている。到達目標としては（1）学校教育に関する基本的な諸概念を具体的な問題の検討を通して理解できる、（2）取り上げられた多様な問題のうち、特に興味あるものについて分析・構造化し、その解決のための見解をまじえて体系的・論理的にまとめられる、の2点を挙げている。

本授業が教育学研究科の研究科共通科目として登場したのは平成10年度からであり、それ以前は、道德教育の総合的研究、生徒指導の総合的研究という2科目が提供されていた（選択必修）。本年度の受講者（修士1年）は30名であり、内訳は、学校教育専攻5名、特別支援教育専攻（特別支援学校教育専修）3名、教科教育専攻22名である。また全体で現職教員は8名、一般が22名である。教員養成学部に基づき、教育現場から派遣される現職教員を含む大学院の必修としては、他に、各専攻・専修の多様性を活かした「教育実践研究」があるが、それに対して本授業は、各領域の知見を学校教育の課題や実践と結びつけ、総合的に考えることができる素地を育成しようとする。

本授業の担当者（10名）は、出講順に、前期が橋本 巖・山本久雄・二宮衆一・露口健司・佐藤公代、後期が、青井倫子・深田昭三・山田誠・伴野昌弘・山口充であった。これらは大学院・学校教育専攻の専任教員のうち、学校教育講座、幼児教育講座の者である。各教員が上記目的・目標を共有した上で、前期5名、後期5名が担当し、自

身の専門分野にかかわる内容について各3回ずつ担当するオムニバス形式となっている（各授業者の授業題目は、大学HPから2008年度シラバスを参照されたい）。多くの受講者が学校教育専攻以外であり、大学院の授業で学校教育専攻の教員の授業を受講する機会は少ない。授業者の個性にふれ、それぞれの専門の多様性をむしろ肯定的に捉えて、教科内容的でない視点から現代の教育問題について再考する機会を歓迎する様子も見られていた（特に現職）。

全体のとりまとめと成績評価の責任者は、当該年度の学校教育専修主任が担当し、授業の開講時のガイダンス、レポート課題の説明なども行ってきた。成績評価は、前期1本、後期1本の計2本提出されるレポートの平均得点による。レポート執筆のために指定された課題は特になく、前期、後期各5名の担当教員の中から関心のある教員（およびテーマ）を一人選んで受講者の任意でテーマを設定し、その講義と関係づけ発展させる方向で各4000字程度のレポートを作成する。レポートは、各学期授業終了の翌週提出を原則とし、受講者がテーマを選んだ講義の担当者が採点者を務める。

2. 授業改善の経緯と授業評価の視点

筆者は平成20年度の専修主任として本報告を執筆した。本学部の授業評価・研究報告書の作成においては、多人数で担当する本授業のようなオムニバス形式の授業まで報告対象に含めることは義務化されていない。しかし、必修科目としての問題がある程度自覚・共有されて、明らかに協同的な改善意思が生じていること、また、今後の大学院改革が検討される中で、次年度からのシラバス立案にも反映できる可能性もあるため、これまでを振り返り、本年度あらためて授業評価アンケートを前期・後期

それぞれに実施して、報告書を執筆することとした。

(1)20 年度シラバスの改訂と新企画の導入

本年度の取り組みのきっかけは、平成 19 年度末の専修会議の際、前専修主任から、受講者が授業の感想やレポートの中で指摘した問題点を伝えられたことによる。

この段階で受講者から挙げられていた問題点は、主に、各授業者の講義の教育実践との関連性、講義担当者間のテーマの連続性・関連性、講義スキル（コミュニケーション、受講者同士のディスカッションの利用、メディアの使用）などに関わっていた。まさに授業のオムニバス形式や、取り上げる内容、授業者間および授業者—受講者間のコミュニケーションの問題点と言えよう。授業への関心や、満足度、履修意欲への影響が懸念された。

一方、教員の側からは、受講者のレポート作成に関する姿勢や文献情報収集などの基礎的スキルが課題とされた。本授業レポート作成のための手引きは配布されているが、提出されたレポートが講義のどこに関連するのか不明確である問題（取り上げた講義の主旨を要約せず、講義テーマの発展というより部分的用語からの連想に近い関係づけ）や、文献検討の不十分さ、等は従前からあった。これらについてもやはりテーマ意識の明確化と、同時にスタディスキル教育の必要性が示唆された。より根本的には、レポートテーマが、関心をひいた講義者ひとりから選ばれるため、授業全体としてその受講者が何を学んだのか、また受講者の中で多様性・総合性はどのように意識され把握されたのかを問うことができていないとも考えられる。

以上が協議された 20 年 3 月の時点ですでに 20 年度のシラバスは作成されていたが、20 年 4 月の開講直前に協議を行い、運用上、シラバスの変更を行った。まず、担当者のテーマの領域性と順序を見直し、前後期間の担当交代も含めてシラバスを組み直した。それにより、実際の講義担当順は、前期：山本、二宮、露口、橋本、佐藤となり、後期は、青井、深田、山田、伴野、山口となった。また一部担当テーマ表現を修正願った。

さらに、スタディスキル教育と大学院生

活への導入の意味で、附属中央図書館利用ガイダンスを本授業の第 2 回に位置づけ、実施した。これは、従来から教育学研究科の現職院生を中心に図書館利用ガイダンスへの参加が熱心であるため、図書館側から提案があったことにもよる。後述する前期アンケート結果が示すように、図書館利用ガイダンスは全体に大変好評であった（また近年のデータベース等の発達を反映して、大学教員にとっても FD として価値のあるものと感じられた）。ただし、前後期 5 名ずつの教員が担当する構成のまま、その中に図書館ガイダンスを加えたため、講義回数が 2 回となった教員が出たことは問題として残った。

(2) 授業評価アンケートの実施と、平成 21 年度シラバスにおける授業改善方針

オムニバス形式の授業を評価する難しさもあり、これまで、本授業全体としての授業評価アンケートは行っていなかった。そこで、試行的ではあるが、共通教育の授業評価アンケートなどで採用されている事項別ステートメントへの賛成度を 4 段階で評定するよう求める方式を参照し、無記名式質問紙を作成した（表 1 参照）。前期、後期それぞれに独自の項目もある。

実施は各学期末に専修主任名で、授業最終回に配布し解答を求めた。評定の際、5 名の授業者全体が対象となるため、以下のように注記・要請した：「各項目はこれまでの全担当者を通しての総合的印象を問うており、『強くそう思う』（4 点）とは、ほとんど全担当者についてそう感じると言う場合、反対に『全くそう思わない』（1 点）とは、ほとんど全員についてそう思わない、という場合と理解してください。また、問題や印象深い点がある場合や、個々の教員・授業によって違うという場合は、総合的にいづれかの選択肢を選んだ上で、『具体的事項』にできるだけご記入下さい。」

3. 授業評価アンケートの結果および授業改善ワーキンググループの設置と、次年度シラバスの作成

表 1 には、前後期 2 回における授業評価アンケートの、項目別評定平均値を示す。以下、まず主要な結果、傾向について概要を報告する。

(1) アンケートの結果と考察

表1 前期末、後期末の授業評価アンケート結果		
アンケート項目の内容	平均評定値	
	前期	後期
1. 授業内容		
1-1 目的・目標のわかりやすい提示	3.11	3.08
1-2 担当者配列の適切さ(妥当・有効)	2.93	2.88
1-3 授業進度・時間配分の適切さ	3.24	3.19
1-4 関心・興味がわいた	3.28	3.31
1-5 シラバスどおりの授業	3.31	3.23
1-6 レポート内容・量の適切さ	3.07	3.19
1-7 レポートの〆切設定の適切さ	2.90	2.65
1-8 (前期)図書館利用ガイダンス導入	3.45	—
1-9 (前期)図書館利用ガイダンスのわかりやすさ	3.52	—
2. 授業方法		
2-1 教員説明のわかりやすさ	3.17	3.19
2-2 資料やプリントの使い方	3.28	3.38
2-3 黒板、メディアの使い方	3.24	2.88
2-4 コミュニケーション(質問機会と教員の対応)	2.90	3.00
2-5 教員の意欲・熱意	3.31	3.35
2-6 討論・グループワークの取り入れ	2.79	2.27
2-7 (後期)授業教室変更の適切さ	—	3.15
2-8 (後期)前期アンケート結果が後期配慮された	—	2.46
3. 受講者自身について		
3-1 シラバスを読んで参考にした	2.79	2.73
3-2 出席状況	3.66	3.31
3-3 意欲的・積極的取り組み(質問など)	2.76	2.50
3-4 授業時間外学習(1回あたり)	1.79	1.54
3-5 (後期)自主的情報収集・検索	—	2.38
4. 授業全体		
4-1 各教員の授業改善努力	2.90	2.92
4-2a (後期)到達目標(1)の達成度(前期は全体)	2.69	2.92
4-2a (後期)到達目標(2)の達成度	—	2.92
4-2b 授業目的の達成度	2.93	2.96
4-3 満足度(全体として)	3.03	3.19
注: 回答者は、前期29名、後期26名。		
評定値は 4: 強く思う、3: まあ思う、2: あまり思わない、		
1: 全く思わない。ただし、3-2は出席度、3-4は学習時間の段階表現。		

評定結果の集計には、全回答者における平均値を算出し、平均値3(「まあ思う」)をひとつの基準として考える方針を協議して設けた。まず、授業内容、方法では、前期15項目中11項目が基準をおおむね超えている。1-4 関心・興味や、4-3 満足度、2-1 わかりやすさ、2-2 資料の使い方、2-5 教員の熱意などは基本的なことであろう。新たに導入した図書館利用ガイダンスもかなり好評だった(1-8,1-9)。

一方、評定平均が3を下回る場合に改善の余地ありと見なす基準によれば、前期末アンケートでは、以下の項目が問題となった。授業内容、方法面では、1-2 担当者配列の適切さ、1-7 レポートの〆切設定の適切さ、2-4 教員とのコミュニケーション、2-6 討論・グループワークの取り入れ、受講者自身については、3-1 シラバス参照、3-3 意欲的・積極的取り組み、3-4 時間外学習、全体的評価としては、4-1 個々の教員の改善努力、4-2a 到達目標の達成度、及び4-2b 授業目的の達成度、であった。

前期アンケートの結果は全授業担当者に9月の時点で知らされていた。しかし、受講者から見ると、各自が前期の授業に対して指摘したことが後期の異なる授業者の授業で十分に配慮されたとは必ずしも評価されなかったようである(項目2-8)。従って、前期の評定で3を下回ったものの多くは、後期においてもほぼ同様の値を示した。

ここで、3を下回る場合、個々の教員に該当する事項ではそれは個人差の大きさを意味する面もあるが、担当者の配列やレポートの〆切など、全体的授業設計の問題点は即座に対応すべきであろう。また、出席や満足度、関心は比較的高く、個々の教員の熱意等も評価されている面もありながら、到達目標達成度や自己の授業への意欲が芳しくないことなどのギャップが目立つ。特に低かった2-6 討論・グループワークについては、自由記述の指摘にも、「多様な専門の教育学研究科院生が集まる授業はこれしかないのに、受講者同士がグループワークをしたりディスカッションする機会が乏しかった」との一貫した指摘が見られた。他に、講義が回を重ねて面白くなってきたときに講義者交代となるのが残念などの指摘もあった。担当者ひとりひとりの

講義充実を可能にし、同時に一貫した授業づくりをすること、また、授業におけるコミュニケーションを活性化することが望まれていると判断された。さらに、提出したレポートについて講評やフィードバックを望む声もあり、教員側として細やかな対応が求められている。

さらに、試みにアンケート評定値間の相関係数を算出し、特に 4-3 満足度、1-4 関心度、に関連する項目に着目してみた。満足度に対して前後期共通に相関(有意と有意傾向を含む正相関)したのは、関心、わかりやすさ、資料の使い方、授業改善努力、授業目的理解、であった。関心度に対しては、目的提示、担当配列、わかりやすさ、資料の使い方、教師熱意、討論・グループワークが共通に正相関した。しかし、前後期とも、意欲的・積極的取り組みに関連する項目はほとんど見いだされなかった。また、授業の時間外学習の時間の長さは、後期においてのみ、関心度や満足度と負の相関傾向が推測され、実質化にとって重要な自主的学習の確保と授業満足との関係は慎重に考慮する必要があると思われた。

(2)ワーキンググループ設置と次年度シラバスの改訂

前期末のアンケート結果が判明した段階で、19年度末からの問題点により根本的に対処した授業再構築が必要と判断されたため、後期末のアンケート結果を待たずに、21年度用シラバス(1月末期限)における授業改善策を検討するためのワーキンググループ(筆者を含む4名)を立ち上げた。

現時点では、教育学研究科の共通必修科目として、通年の4単位であり、学校教育専攻の教員が授業を担当するという点は同じである。また「学校教育の総合的研究」としての目的も大筋では変え得ない。しかしその制約の中で、数次にわたり改善方針を協議した。

その結果、以下の①から⑥のような授業改善方針により、21年度のシラバスを作成した。

①まず、前期の共通テーマ、後期の共通テーマをもうけ、各学期3名で担当する。前期は「学校教育の課題と現在」、後期は、「学校教育と生涯発達」、とする。担当順序や相互の内容的関連性と専門性の相違を

工夫するため、担当者による話し合いを持ち、各自のテーマ設定を検討した。②各授業者は、4回ずつ授業し、それぞれが短めのレポートを課す。③各自の担当授業において、受講者参加型の工夫を行う。④また、学期冒頭には全担当者による内容・研究紹介を兼ねたオリエンテーションを設け、⑤学期末には、受講者によるシンポジウムの行事を予定する。各学期授業担当者は全員出席を原則とする。⑥20年度開講当初に導入した図書館利用ガイダンスは、非常に好評であるため、図書館との履修指導協議のもと、引き続き実施する。

新しいシラバスより、授業概要を以下に掲載する：「前期は、『学校教育の現在と課題』』という共通テーマの下で、学校教育の中核を担う小学校から高等学校までを念頭に置き、その主要機能である学力形成のあり方を中心として議論を行う。講義テーマとしては、『学校教育改革の動向』(山本)、『現代の学力問題』(二宮)、『信頼を構築する保護者関係マネジメント』という3つのテーマに沿って学び議論する。

後期共通テーマとしては、『学校教育と生涯発達』を掲げ、講義テーマは、順に、『ひとりひとりの多様な知性』(深田)、『様々な感情と自己の発達』(橋本)、『生涯にわたる学びの機会』(山田)をとりあげる。後期では、前期に行った学校教育の中核的機能の考察をふまえつつも、一般に「いづれがちな学校＝教育＝学習」という想定を問い直す。そのため、時間軸(学校教育の予備的段階である就学前教育や、学校教育後の成人教育を視野に入れる)や、知的学力以外の感情・人格領域における人間形成、などに視野を拡張して学校を相対化し、学校教育のあり方への考察をさらに深めることを目指す。」

以上の方針について、後期末の授業評価アンケートで報告したところ、好意的な感想を受けたが、改善を「実質化」すべく、担当教員のコミュニケーションと研鑽が求められている。